

【著者紹介】

浜 祥子・はま さち

〔略歴〕

北海道に生まれ福島県三春町で育つ。県立安積女子高校、中央大学文学部卒。教師を経て、創作童話、児童向け読み物の執筆に携わる。

一九八九年 童謡「折り紙にしたいな」で童謡大賞受賞。

一九九二年 童話「おじいさんのすべり台」で小川未明文学賞大賞受賞。

〔著書〕

せかい伝記図書館「レオナルド・ダ・ヴィンチ」

「キュリー夫人」「マゼラン」（いづみ書房）

「野菜をつくる農家」「ことばづかい大研究」（ポプラ社）

「初旅のスペイン語」（南雲堂フェニックス）

「おじいさんのすべり台」（N.T.T出版）

「ドンはふつうのねこじゃない」（旺文社）

学校でカリキュラムに組み込まれているどの教科も、それぞれ大切なものです。

しかし、生きる力としていちばん必要なのは自分の思いを伝えたり、相手を理解したりする想像力、表現力としての「ことば」を培うことでしょう。

ことばなくして考えることは出来ません。

「キレル」とか「ムカツク」というのは、ことばが見つからない状態のぎりぎりの自己表現でしょう。まだことばで訴えているのですから救いがあります。

ことばが育つ心の教育こそ最優先されてほしい。

ことばを探すことは宝探しです。いつ、ペン見つけたら、ずっと財産としてその人を肥やし続けていくのですから。

ナチスの犠牲となった少女アンネ・フランクは、隠れ家での崩れてしまいそうな精神を、日記を書くことで支えることが出来たのです。最悪の条件の中でさえ、自己を啓発し続けることができたのも、イマジネーションとしてのことばに支えられていたからにほかなりません。

流出する激しい感情は「ことば」を得て、他者との理解を探る方向へと向かうでしょう。それはやがて文学を創造し得る力になるかもしれません。

行き場を探せない感情に、ナイフを持たせてしまう轍を踏まないためにも、その子を一生支える糧としての「ことば」を、時間をかけて育んでほしい。

心に届く教師のことばで。

提 言